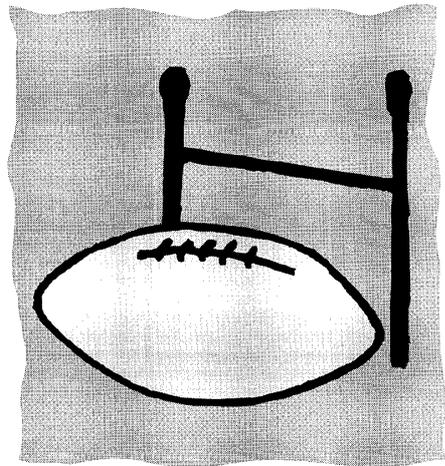


2007年度

# 卒業論文



# 剣術並びに居合の「型」の比較に関する研究

## －「型」伝達の連続性の問題について－

井下 英樹

**キーワード：身体運動，武術，「型」，比較，形骸化**

特記：本稿は関西大学文学部総合人文学科身体運動文化専修へ2008年1月10日に提出した卒業論文に修正を加えたものである。卒業論文の提出に際しては卒業演習の指導教員である川本武之先生のご指導を得てその作成を行った。また今回の修正作業にあたっては身体運動文化専修の伴義孝先生にご指導を仰いでいる。

社会人を経て関西大学へ編入学したのは、私が実践している武術という「不立文字の世界のもの」を如何に言語化したらいいのか、その表現方法を探ることを目的のひとつとしていた。何とかして正しく確かなものを後世に残したい。その為には言語での表現が必要であると考えたからである。しかし、それ以前の、論文の構成の仕方、参考文献の引用や表記方法、段落や行間の空け方など、論文作成の初歩から覚えることとなった。

私のスタンスとしては、まず実践ありきであり、言語化することなどは二の次である。まだまだ未熟な技量である。本来なら言葉にする資格もない。しかし、この論文作成は、不立文字の世界を言語化するという目的の成就に向けて、私にとって、確かな手ごたえと訓練となり、さらに考え方を深める為の契機になった。

遠い将来のための「知の貯蓄」というつもりで学生生活をしている私にとって、時間の

許すかぎり興味ある対象に打ち込むことのできたことは、本当に有難いことである。これまで様々な経験をさせて頂いた関西大学に、そしてご指導を頂いた先生方に心から感謝する次第である。

なお、卒業論文提出時の本稿の原題は『剣術・居合の「型」の比較による「型」伝達の連続性の有無に関する研究』であった。このたび、関西大学身体運動文化学会の『身体運動文化フォーラム』に掲載されるに当たって、その原題を、標記のように改めている。

### 1. はじめに

本研究は、標題に関して、正しく確かな「型」の伝承を確立する為に「『型』の形骸化の問題」について考究してみることを目的にしている。

まず申し上げたいのは、今の筆者には武術に関して何も語る資格はないということである。それは正しく確かな技を修得した者のみ許されると考えるからである。武術とその思想は後世に残すべき貴重な日本の文化遺産のひとつであり、理論と一体となった実践学であると確信している。如何にして言語化すべきか。訓練の一環として卒業論文の場を借りて一文を起すことをご容赦願いたい。

スポーツを近代的現代的身体運動とするな

らば、武術は伝承的身体運動である。古来より日本において武術は「型」によってその技の伝承を行ってきた。今現在、様々な武術、武道、格闘技団体が乱立している。巷では「K-1」や「総合格闘技」が人気を集めている。確かに彼らは強いし、闘う勇姿に血湧き肉踊る思いにもなる。しかしあの姿は伝承の技で形成されたものであろうか。また空手などの「型」試合のそれが果たして「型」と言えるのか、筆者には疑問である。人が変わり時代が変わり、風化、形骸化したものが横行しているように思えてならない。

武術本来の技の本質を観て取ることは、非常に困難を極めることは筆者の経験からは明白である。同じ師に就いて同じ時空間において指導を受けても、個々の本質を捉える目の優劣によっても受け取り方は様々である。形骸化ということは、「型」伝達上止むを得ないとも言える。しかしそれを何とかして後世に残そうと、先達はえも言われない芸事のことを言葉で綴ってきた努力の軌跡が様々な書物を通して伺える。

本研究では、技を正しく修得するにはどのように実践していけばよいか、形骸化の起こるのは何故か、あるいはどのようにして起こるのか、次代に繋げていくにはどうしたらよいか、転じて人のために生かしていくにはどうしたらよいか、そのようなことをこれからも模索していきたいと念じている。関西大学文学部総合人文学科身体運動文化専修に在籍した理由もまた、これらの問題をただ深く追求したいが為である。

但し将来伝承の技を身に付けることが出来なければこれらの言葉は机上のものとなる。むしろ技を歪める、形骸化させる要因にもなると考えている。ひいては「私」という存在すらもまた形骸化させるものである。その時には封印しなければならない。

そのような身の上の者が記すものであること、そして言葉に綴る内容も筆者の実践経験

を逸脱するものは、到底言葉にできぬことを強く自らに戒めることを強調した上で始めた。しかし、こうした行為が、遠い将来においてほんの僅かでも確かな一歩であったであろうことを切に願っている。

## 2. 研究方法

本研究では、剣術並びに居合における「親流派と支流派」について、また、「流れの異なる流派」について、「資料」及び「筆者自身が体感を通して得た経験」を基にしての比較検討を試みる。同時に時代背景を通して「形骸化」する一因を考えてみる。剣術においては新陰流を親として支流派の駒川改心流との比較(本論Ⅰ)を、居合においては親を田宮流として支流派の民弥流との比較(本論Ⅱ)を、そして流れの異なるものとして再び剣術における新陰流と一刀流との比較(本論Ⅲ)を試みる。また、比較検討を試みる時代背景(本論Ⅳ)については、諸流派の興った戦国時代を生きた新陰流の創始者である上泉伊勢守の生涯を通して観ていきたい。

このような比較を試みようと思いついたのは、かつての剣の師と空手の師の指導が方法的に全く異なった内容であることがきっかけであった。剣と空手という安易な違いだけではない、もっと本質的なものが違っていた。前者が「身体の動きの巧緻性を高める」稽古に対して、後者は直接的に「気」を指導されるものであった。身体の動きの巧緻性を高めるとは、「型」によって動きに様々な条件が付いた、緻密な動きを満たすその訓練である。「気」と言っても、筆者の学んでいる「気」は、いわゆる気功の類とは違うものである。

このような経験から「筆者が今まで稽古してきたものは本当に形骸化していないものであろうか」という一抹の疑問を持った。そこで筆者の学んだ流派の親流派や、流れの異なる流派との比較を思いついた。流れの異なる流派として一刀流を選んだのは、空手の師は

同時に居合並びに剣の両道にも通じている人物で、時折竹刀や木剣や真剣で指導されるその姿から、未だ見ぬ一刀流の極意を観ているような気を感じ取ることができたからである。聞けば空手の師は山岡鉄舟に心酔しておられ、山岡鉄舟もまた一刀流を学んで自流を興した人である。

また、もっと古い筆者の記憶で、ある程度腕が立つようになったら他流派の研究も必要であるということ、また当流においては「可」といわれる動きと構えが他流では「不可」であり、その逆もまた然りであることが稽古の途上にはあって (黒田・1988・pp.96-98)、それは暗に新陰流と一刀流系統の関係を指しているのではないかと思っていた。だからいつかはこのことも筆者なりに理解したいという願望があった。本研究の始まりはそのような理由からでもある。

### 3. 研究の前提条件

本研究では、標題について検討する為に必要とする「基本用語」などの概念について、筆者の捉え方を最初に整理しておきたい。その上で、本研究は以下に整理する基本概念を軸にして、標題の問題について検討するものである。

#### 3-1 スポーツと武術：身体運動の観点からの捉え方

競技スポーツでは、いわゆる「心技体」と称して、「心(しん)」はリラクゼーション等のメンタル面の訓練で、「技(ぎ)」は各競技のスキルの訓練で、「体(たい)」はランニングやウェイトトレーニング等を行うことで、全体的な身体運動の訓練を通して競技におけるパフォーマンス能力を高めていくものと認識している。それに対して武術は「型」を中心とする身体運動を通して訓練する。初めは窮屈とも思える「形と構え」を通してそこから高度な動きの働きを目覚めさせ磨いていく

という行為である。

スポーツの長所は、短期的に能力が高められること、競技を通じて戦略的なキャリアが積めること、発散性があることなどである。反対に、武術の場合は、「出来る」ようになるまでに「時間がかかる、長期的である」という特徴のもとに(あるいは一生かけても出来ない可能性がある)、その故にスポーツ競技のような実践にすんなりなかなかな漕ぎ着けないときすらあって、内省的であるといえる。そこで武術ではある段階のことが出来るようになれば高度な能力が身に付くのだが、その理由は、心身において己を観つめる内省的行為が顕在化されるものであると考えている。

そして、スポーツと決定的に異なる武術の特徴は生涯にわたってその能力を高めていける可能性そのものにある。スポーツでは体力的な衰えがそのパフォーマンス能力に直接的な影響を与える。パフォーマンスを支えているものが主に筋力的な身体運動だからである(時津・1993・p.63)。反対に武術では、単に筋力的、体力的ではないところの内発的な身体運動で能力が構成されている関係で、一端ある段階に至れば、後は本人の訓練次第でさらに能力を高めることができるのだと考えられる。

例えば筆者の場合足捌きがそれであり、大地を踏みしめないで歩を進めるという、普通一般の体の使い方ではない歩き方、歩み方になっている。修行では、一端安易に動いてしまう体の使い方を「型」稽古で制御し、それこそ赤子の如く最初から「体」の使い方を訓練する。稚拙な動きを徐々に慣らして、生活の中でもその体の使い方を集中的に実践して、足捌きは自然に(おのずから)動けるように訓練する。そうしてさらに実践及び実戦の場に使えるよう「絶対量」の訓練を課していく。単純に筋力を高めるというものではないから、習熟したそのあとも死ぬ瞬間までその技術を持続的に磨くことが出来るのだと考えられて

いる。

しかし、少なくとも筆者自身の経験で「身に付いた」と納得できる段階に至ったのは「10年以上を要する」ほどの息の長いものである。その結果、一般的に言われるアスリートとしての適齢期を過ぎてしまうことにもなった。また筆者などは、実戦を通したキャリア的競技的側面からみれば、その分野のアスリートと比べて、これに乏しく弱いことこの上ない。

その反面ようやくある段階のことが身についた「私」という存在に、もっと磨きをかければ通常のスポーツ的訓練で育ったアスリート以上のものが出来上がることも自認できる。スポーツにおいても武術においても能力向上における長短はある。しかし、筆者は、内発的な「能力」の発揚に惹かれるものがあって、武術を選んだということである。

### 3-2 「型」とは

中国で「型」を基盤にしている代表的な身体技法は太極拳や八卦掌、形意拳などがある。中国では「型」を「套路（とうろ）」と呼んでいる。流派ごとに動きの手順があってそれに従って身体を動かしていくのが一般的な「型」の最初の認識である。武術でなくとも例えば日本の茶道でも作法というものがあって、手順通りの決まり定まった動きをしていく。

武術においては最終的に人と相対して生死を分かち究極の局面がある。その局面において勝利を得る為に、武術は生まれたと考えられる。ところが、筆者が最初に習った空手団体においては、「型」が見た目に上手い人でも、組手では必ずしも強くないということが多々あった。「型と組手は別物」という言い回しもあるのだが、それでは何故「型」といわれるものが存在するのか。

確かに例えば同じ「突き、蹴り」を主体とした格技に、「ムエタイ」というタイの国技

がある。このムエタイには若干の「型」があるものの、実戦的訓練は「ミット打ち、サンドバッグ、シャドウ・スパーリング」などで構成されている。そして空手のように深く腰を落として訓練する動作などは見当たらない。単純に足腰を鍛える為に腰を落とすというのはあまりにも浅い考えであるように思えたり、また「型」が実戦に役に立たなければ存在する意味がない。「型」の生成理由のひとつに形式美という「考え方、捉え方」もあるのだが、筆者にとって自らの身体を通して実践している限りそのようには考えられなかった。

「かつて名人、達人といわれた人が何とかしてその技と心を伝えたかったのではないだろうか。その伝達手段が『型』であり、人が変わって時代が変わって正しく伝わっていないのは、現代の我々の側に問題があるのではないだろうか…」

という「想念」が実践を通して直観して得た筆者の確信であった。この確信を体得してからの筆者は以来古流の剣や居合や古伝空手などを学ぶに至る。

今確実に言えることは、生きた「型」を身に付けている師に就いて学ぶことで、その「型」の手順の奥にある確たる何かを体得することが、正しく確かなものを身に付ける唯一の手段であるということである。「型」とはそのような真の技を伝える媒体ともいえる。「型」を一つの生命体に例えるなら、正しく受け止めることのできる人間の「伝承」によってのみ、「型」はその命脈を存続できるのではないか。筆者はそのようなものを「型」と認識している。

### 3-3 形骸化について

ところが、あたりを見廻してみると、どれだけ実質のある型が残っているのだろうか。「型」の手順以上の深い認識を以って「型」稽古で訓練している人が果たしてどれくらい存在しているのだろうか。恐らく大抵はその

手順以上の手がかりがないまま反復訓練しているのではないだろうか。「一応昔から伝わっているから」とか「昇級、昇段試験、型の試合の為に」とか、「健康の為に」とかなどが「型」稽古をする理由になっているのではないだろうか。

筆者も最初はただ言われたまま理屈を考えずに動くことしかできなかった。しかし段々と手順も覚えスムーズに動けるようになってからのちには、「何故このような動き、構えがあるのか」「実戦にどのように繋がるのか」と考えるようになり、「型」の動きについて次第に関心を持つようになり興味を惹かれるものであった。

実際に剣道や空手や柔道やキックボクシングなどの試合、競技で見るその動きと、「型」の動きは大いにかけ離れていることが分かる。打つ、突く、蹴る、投げるといった動作は同じであるが、「型」のそれらは時として実戦においてはあり得ないと思われる動きや構えである。

例えば、空手の「型」に一見足を内股にする構えで動く、あるいは剣術の「型」で四股立ちからさらに足指を外に向ける、「一文字腰」という構えで半身をとり歩み進む動きがある。少しだけの実践では、これらの動きは、実戦の動きや構えからはほど遠いものと考えがちになる。あるいは動き構えの実相がよく分からない為に「型」稽古よりも、組手や乱取りやスパーリングなど実戦的シミュレーション的な訓練に目が向き易くなる。そして確かにそれらの訓練のみで試合に勝つ場合もある。加えて才能や努力次第で優勝してチャンピオンになる者もいる。

それでは「型」の存在理由は何であろうか。筆者における「型」とは微細な感覚で自身に内在する高度な動きの理に気づいて磨き上げる内発的な動きの表出的な集約であると考えている。このように考える筆者は、反対に、ここに指摘する「集約」としての「型」本来

の存在理由を成してない「型」稽古の有り様を、形骸化として捉えている。

そこで、次章からは、本論として、剣術並びに居合の「型」の比較を通して、そこから浮かびあがる同義もしくは差異を見出し、形骸化の要因を探しだす為に考察を試みる。

#### 4. 本論 I : 剣術編 I - 比較検討と考察 -

本章では、標題の問題を比較検討する為に、「本論 I : 剣術編 I」として「新陰流」と「駒川改心流」の関係について、以下の3節「4-1」「4-2」「4-3」にわたって考察を進めたい。

##### 4-1 新陰流と駒川改心流：序の段

新陰流は上泉伊勢守信綱が創始した剣術の一大流派である。一説には新陰は「神陰」の用字であるという向きもある。陰流を創始した愛州移香斎に学び、「陰流において奇妙を抽出して『新』陰流を号す」と伊勢守自身が命名したという説(諸田・1984・pp.118-119)と、あるいは松本備前守の鹿島神流も学んだので「神」の字を宛てたという二つの説(山田・1925・p.40)がある。

本研究では柳生新陰流の資料も同義のものとして取り扱う。柳生新陰流では「新」の字を用いるので、本稿においては「新陰流」で統一していく。新陰流の技を知る上で、現在鎌倉で新陰流稽古「沈龍の会」を主宰する赤羽龍夫の著書『柳生新陰流を学ぶ』には貴重な技の数々が写真とイラストで紹介されており、大いに参考にさせて頂いた。同書にはこれまでにない「型」の手順及び構成を惜しみなく公開されていることに驚かざるをえない。

それによると今現在まで柳生新陰流として伝わっているのは「燕飛」6本、「七太刀」7本、「三学円の太刀」5本、「九箇(くか)の太刀」9本、「天狗抄」8本、「奥義の太刀」6本の計41本の勢法(型)である。(赤羽・2007・pp.84-85)

一方の駒川改心流の流祖は駒川太郎左衛門国吉といい、上泉伊勢守に就いて剣を学んでいる。腕が上がっても師の伊勢守はよしとせず、そこで太郎左衛門は他流の免許を取って戻っても尚、伊勢守は首を縦には振らなかったと言われている。ある時、太郎左衛門が屋外で工夫を凝らしていたところ、狼の群れに囲まれた。その難を逃れたのは脇差一本で、襲い掛かる狼を全て体捌きでの引斬りの一手によるものであった。頭越しに攻撃を外して顎から腹にかけて斬り払ったのだと伝えられている。其の時に翻然と悟るものがあり、我が身の大成を期した師の心を疑ったことを深く反省して、それ以後号を「改心」と称えるようになったと言われている。

改心流においては、その流祖の技と心と精神を伝えるべくこの引斬りの一手が表の型の一本目となっており、極意の型である（黒田・1992・p.24）。これを含む「表中太刀」6本、「表十手」12本、「小太刀」12本、「表薙刀」6本、「両刀居合詰」12本、「奥三ッノ太刀」9本、続いて奥薙刀、奥十手、表奥の三ッ道具、八重鎖鎌、鎖鎌、奥太刀、奥義などとなって終わる（黒田・1992・p.92）。筆者が学んだのは奥三ッノ太刀の途中までである。

#### 4-2 新陰流と駒川改心流：破の段

筆者はかつての剣の師から「やっていることは新陰流の極意そのままである」とか「例外はあるが流儀、流派ごとに差はない」と言われて育った。ところが実際に両派を観比べてみると「まるで別物」という印象が強い。

まず比較を試みる前には、親と子だから結構似ている所があるだろうと勝手に想像していた。ところが予想に反して「型」の手順、呼び名、構成が違っていた。そして問題なのは、例えば筆者が仮に（柳生）新陰流の「型」稽古で育ったとして、果たして駒川改心流から学び得たものと同じ身体技法を身につけられるのか、ということである。理屈で言えば

そうならなければならない。しかし大いに疑問となるほどの差異が認められた。

姿勢や構えに関して言えば、柳生新陰流はイラストや写真で見ると、腰を反身（そりみ）にした姿勢をとり、かつ体軸を垂直にした構えをとる。しかし駒川改心流ではこのような姿勢や構えをとらない。これが一番に気になる印象であった。

筆者は「修業とは『構えを知る』ということに全力を尽くすこと」と教えられてきた。今までの経験に照らせば、人の姿やその写真の有り様を観るに際して、筆者は美術の世界における審美眼と同義の眼を養うことができたことと自認している。普通に突っ立っている身体にも、普通の何でもない立ち姿である身体と、練られた結果としての立ち姿のそれは明らかに違う。少なくとも筆者が学んだ範囲において、この異同を、大概にして観取ることのできる自負がある。

ところが、予想に反して親と子の流派の姿勢の有り様が異なっていることに戸惑いを感じた。これこそ、一方では「可」であり、もう一方では「不可」というものである。後述するが新陰流のそれは、むしろ一刀流系統のものと同様の様相を呈するものである。

もっと広義に観れば、例えば中国武術、形意拳や太極拳は反身の姿勢は求めていないと観える。また筆者の学んでいる古伝空手においては反身の傾向であり、それは一つには重心を下へ落とすためと認識している。何が是で何が否なのか。長い年月の間に風化し形骸化してしまったのか。現段階では何とも言えないが、最終的には、どの流派であれ「出来る」というところまで実践するしかないと考えている。

それでは、「斬る」為にはどのように太刀を操作すればよいのか。改心流で育った筆者が少なくとも指摘できるのは、両腕を完全に伸展した状態で、腕力に頼ることなく、もっと腕の付け根の奥深いところの胸や腹までの

繋がりの中で、単に「打つ」のではなく、まさに「斬る」のである。

また「斬りの体捌き」といわれる左右の半身から反対の半身への変化を伴った剣の操作によって、単純な手振りではなく、体全体を使って操作をする故に「斬れる太刀筋」が生まれる。この半身から半身の細い一本の線の上で、互いにその線を取り合うが如くの動作の反復があれば、いつの間にか体の幅の身体感覚が徐々に狭くなり、次第にわが身の中に鋭利な線の如きものがあるように感じられるようになる。いわゆる「正中線」というのはまずはこのことであると認識している。これは体軸ともまた違う。体軸は訓練しなくても誰もが身に付けている。正中線は訓練の結果身に付くものであると認識している。

正中線を体得できれば、効能としては、いつの間にか半身から半身の入れ替わりが素早くできるようになる。後方に体ごと振り向くという動作等を非常に早く完結することができる。この効能は、実戦において紙一重で太刀から身を守る、あるいは多人数掛けのような後方の敵にも瞬時に対応するのに有効な操法(身体技法)であるといえる。

しかし、新陰流の「型」の構成と実際の写真を見た限りでは、このような半身の入れ替わりを求めているように観える。「型」の種類によってはさほど体捌きによらない太刀の操作を感じる。「太刀筋のある」人ならば問題ないだろうが、「型」で練っていない人がいきなりその「型」を演じてみても太刀筋の大事に気づけない、あるいは全く思いもつけないという事態を引き起こすように思える。

新陰流には「位五大事」の教えというものがある。それは第一に相手の拳の高さと自分の肩の高さを同じくすること、第二に半身になること、第三に拳と体を一体とし拳を下げないこと、第四に前足の膝に体をかけて入り身となること、第五に左の腕を曲げないこと、というものである。(黒田・1992・p.26)

これらの教えに照らし合わせて今一度両派を観れば、大勢的にはこれらの教え通りであるが、詳細はそうではないようにも見受けられる。明らかなのはこの反身の姿勢が、新陰流には「ある」のだが、改心流には「ない」ことで、そして「型」の構成を観ても、新陰流の技の攻防においては、半身から半身の入れ替わりで技を繰り出すという動作が緻密でない、ということである。それに対して改心流では緻密にそれを保持した形の「型」の構成となっている。

#### 4-3 新陰流と駒川改心流：急の段

ここまで顕著に違いが出るのは何故だろうか。それは一つには独自性ということが考えられる。師事する上泉伊勢守が駒川太郎左衛門の技量をよしとしなかったのは、技において手癖があったからだと思われている。先述した狼に襲われた後、このことに太郎左衛門は気づいたと言われているが、この経緯が自らの流派を興す際の「型」の構成に影響を与えているのではないだろうか。手で打つのではなく、半身から半身での体捌きで太刀筋を生むその動きでの技の攻防が改心流によって強調されているように思える。反身の構えに関して言えば新陰流のそれを踏襲してはいない。この点に関しては後に一刀流との比較で再考する。

何が伝わって何が失われるのか。工夫による進化なのか。それとも全く本質の失われた形骸化なのか。ここでは一概に答えようもない。しかし、これだけ近い流派であっても、ここまで技の構成が変容している経緯に、元の「型」が形骸化してしまうその要因の一つがあるのではないか。こうした経緯が何となく文献から読み取れる。力量にもよるが工夫し研究して独自性を求める形で「型」もまた変容するのではないかということである。

しかし一つの流儀、流派を超えて独自性を出すとなれば、経験的にもそれは至難であっ

て、その人の相当な力量が必要であると考え  
る。一方では、力量もなく、またあるとして  
も低い認識の基に生まれる流派もあるだろう。  
その場合がまさに形骸化そのものである。

筆者が改心流で育ったということを百歩譲っ  
て観ても、この駒川改心流は新陰流を踏襲し  
ながらも、独自性を持ち現代にまでその本質  
をよく伝えている流派であると考え。しかし  
例えば「半身」に関して先に指摘した両派  
の差異をどう考えればいいのか。後続の比較  
においても、この点について、もう少し明ら  
かにしたい。いずれにしても改心流は筆者が  
新陰流を観る上でも非常に貴重な存在の流派  
として、今後も実践し工夫し磨いていくと同  
時に、他流派を観ていく一つの基準として位  
置づけたいと考える。

## 5. 本論Ⅱ：居合編－比較検討と考察－

本章では、標題の問題を比較検討する為  
に、「本論Ⅱ：居合編」として、第4章と同様  
の視点から、「親流派」と「支流派」の関  
係にある「田宮流」と「民弥流」につい  
て、以下の3節「5-1」「5-2」「5-3」  
にわたって考察を進めたい。

### 5-1 田宮流と民弥流：序の段

田宮流は「居合の祖」といわれた林崎甚  
助重信に就いて学んだ田宮平兵衛重正を流  
祖とし、その子対馬守長勝の時代に田宮流  
を名乗ったという。江戸時代には徳川紀州  
藩の武芸として伝えられている。江戸末期  
にこの流派の名人であった窪田清音は、見  
渡せば剣の本質が伝わっていないことを憂  
えて、口伝のみの技の伝承を記述すること  
で伝え残そうとした人でもあった。(武道  
傳書集成第1巻・1988・pp.146-150)

田宮流に関しての技や動きは市販のDVD  
を参考にさせてもらった。また彦根市図書  
館にある田宮流剣法皆伝目録によれば、居  
合傳8本、階級17本、請方次第10本、居  
合変化1本、

左右懸3本、立合傳7本、小刀3本、試合  
組12本となっている。DVDでその動きも  
確認できたのは初めの8と17本の計25  
本である。(前掲書)

一方の民弥流は無楽流上泉派もしくは上  
泉流とも呼ばれる。一説には上泉伊勢守  
の孫あるいはその親族である秀信が長野  
無楽斎に就き無楽流を学んだという。秀信  
が母方の民弥姓を名乗ったことからこの流  
名になった。長野無楽斎は田宮平兵衛も  
しくは林崎甚助にも就き居合を学んだと  
伝えられ、秀信もまた林崎甚助や田宮平  
兵衛からも居合を学んだと伝えられている  
(山田・1925・pp.151-155)。民弥流  
の「型」は表ノ型6本、立合ノ型6本、  
影手合9本、以下奥手合、奥義、極意、  
印可の巻と続く(黒田・1991・p.264)。  
筆者が学んだのは影手合までである。

### 5-2 田宮流と民弥流：破の段

両流派間でも「型」の手順、呼び名、  
構成が全く違うことに驚く。特に異なる  
のは坐るその構えである。田宮流が正坐  
からの「型」の構成であるのに対して、  
筆者が学んだ民弥流では「座構え」とい  
う、左足は普通の正坐の有様にして右足  
は踵を左膝に寄せて右膝を立てる坐り方  
である。他流においても例えば無双直伝  
英信流では、立膝の構えはあるものの多  
くは正坐である。また立膝の坐り方も民  
弥流のように右足を前には出さない。(三  
谷・1986・p.74)

まず坐るということが何を意味するの  
か。それはまず脚力を否定するためであ  
ると教えられた。先述した大地を踏みし  
めない足捌きを身に付ける目的で、まず  
坐るのだと認識している。事実「型」の  
動作の最中、少しでも力の「ち」の字ほ  
どの力みが足裏に出れば、捌く両手に  
その力が伝わり、太刀が鞘から抜けな  
くなるという現象が起こる。少なくとも  
民弥流においてはそうである。そのよう  
な真の斬撃力に繋がらない生の力を否  
定する為、

まずは、その脚力を排除する目的があるのだと認識している。

では何故正坐ではなくて「座構え」なのか。それは、三角の規矩（かね）と呼ばれる「右膝」と「体（たい）」そして自身の遥か右後方にある「膨大な円の中心」の三つを軸として、それらを崩さぬよう行う体捌きの練磨を目的としていると教えられた（黒田・1992・p.47）。表ノ型1本目に真ノ太刀という「型」がある。今の筆者にはこれが端的に民弥流の本質、基本をよく表している「型」に思えるのだが、まさに大きく左半身を開き太刀を捌き発剣する。ここでも駒川改心流同様手先ではなく体全体を使った操法（身体技法）となっている。

正坐ではこの技の構成を作るのは難しい。「座構え」だからできる構成である。筆者はこの民弥流の「型」で育ってきたので、正坐よりもむしろ「座構え」のほうが私にとって至極当然のように思っていた。しかし多くの流派は正坐であり、田宮流もまた正坐であることに戸惑いを覚える。そして太刀の抜き方に関しても大いに差異を観ることができる。

田宮流では右手で太刀を鞘から抜くのに対して（ある「型」においては体捌きの働きを確認できるものもあったが）、民弥流ではむしろ左半身を大きく使って左手で鞘を操作して抜きつける。そして抜きつける瞬間、鞘を持つ左の手首を「斬り手」という構えにとり、鞘を縦に送り落とすのである。しかし、このような所作は田宮流では全くなかった。ここでもまた先の剣術の流派の比較と同様、親と子の流派の間に差異があり「型」伝達の連続性が認められなかった。

### 5-3 田宮流と民弥流：急の段

田宮流の動きをDVDで確認しまず思ったのが、左半身の体捌きが大勢的に観られなかったことである。「型」の類において、その手順の構成上、動きに必然的に観られる程度で

ある（あるいはその大事に気づかせるのが「型」の所以でもあるが）。それに対して民弥流は大いにそれらの所作を伝えている。

この差異は一体どこから来るのであろうか。先述したように、民弥宗重（上泉秀信）は林崎甚助や田宮平兵衛、長野無楽斎らに学んでいる。無楽斎もまた林崎甚助の弟子であるという向きもある。それだけにこの師弟の間で「型」の本質的な部分の伝達の変容はあまり考えにくい。それでも代が変わるごとに自らの流儀、流派を打ち立てている。田宮流から民弥流になるのは、さほど時間はかからないのに技術的な変容に関しては、例えば正坐から「座構え」へ、あるいは切っ先の離れの際に鞘を縦送りし落とすような所作などが先述通り民弥流では見受けられる。技術的に見た場合の両派の是非はあるが、田宮流を親とするに子である民弥流のこれほど明確な変容はない。

剣術編に引き続き、居合編においても比較をして思うのは、どの流派も根底の本質は皆同じというのは確かにそうであろうが、これだけ変容しているとやはり何か特別な経緯があるのではないかと感じてしまう。筆者には、直観も多分にあるのだが、それらは必ずしも形骸化ではなく、むしろ先代の技を一応にして踏襲した上で、創意と工夫を自流に出しているようにも受け取れる。日々の生活における「死生」の問題が身近にあった時代の武術に対する姿勢や意識の有り様は、現代の我々と比べて、かけ離れた次元のもとにある。だからこそ、こうした「創意と工夫」が可能であったのではないかと思えてならない。

「弟子は師の半ば至らず」

という言葉がある。これは、弟子が生涯かけても師の達したところまで到達するのさえ見当がつかないほど、師との隔絶とした差があることを言い当てている。この経緯は、私の知る「真の武術」を習得する過程における絶望的ともいえるほどの難しさからみても、そ

の通りである。本当に、この分野を実践してきて、つくづくとそう思うのである。

しかし、かつては修行の如何においては、師をも上回るほどの人物が傑出したこともあったかもしれない。特に居合における技の変容を観るにつけそのように考える。しかし、そこには本人の想像を絶するほどの修練を自らに課したという結果であることが観察できる。そうでなければ一つの流儀、流派を超えられるものではない。かつてはそうして一流を成したのではないだろうか。

## 6. 本論Ⅲ：剣術編Ⅱ－比較検討と考察－

本章では、標題の問題を比較検討する為に、「本論Ⅲ：剣術編Ⅱ」として、第4章と第5章とは異なって、「流れの異なる流派」の関係としての「新陰流」と「一刀流」について、以下の3節「6-1」「6-2」「6-3」にわたって考察を進めたい。

### 6-1 新陰流と一刀流：序の段

次に流れの異なる流派として一刀流を取り上げてみる。新陰流は先の比較で述べた通りである。ある流派では腰を落とす「沈身」そして「半身の構え」が「可」であるのに対して、沈身や半身は「不可」とされる流派がある。「不可」側の流派が一刀流系統であるという先入観が以前からあった。沈身や半身で身体を鍊るということはまずありえない。

今回の研究における一刀流の「型」の手順と動きについては、故笹森順造の著書『一刀流極意』の言及を大いに参考にさせて頂いた。この一冊から故人の一刀流に対する並々ならぬ想い入れがひしひしと伝わってくる。

一刀流の祖伊藤一刀斎影久は、初めは富田流の鐘巻自斎に就き学んだ。富田流は中条流という、室町時代初期の古い流れを汲む、流派から出ている。伊藤一刀斎は幼名を前原五郎と称した。一刀斎が生きた時代は戦国の世相を呈したこともあり、自身は、住居も構え

ず、孤独の旅を続け大自然と親しむことを楽しみとした生き方だったようである。常に各地を行脚して教を請う者にはこれをよく教え育てたという。(笹森・1986・pp.26-64)

その中で秀でたのが神子上天膳、後の小野次郎右衛門忠明である。多年に渡り一刀斎についた後、一刀流を正式に継いで師とは生別したといわれている。二代目の忠明の代に一刀流は大成した。後に分派して小野派、忠也派、梶派、中西派などの流れが興り、千葉秀作が北辰一刀流を、寺田有孚が天真一刀流を、山岡鉄舟が無刀流をそれぞれ興している。ところで、『一刀流極意』によれば「型」は大太刀、小太刀、合小太刀、三重、刃引、払捨刀、五点、ハキリ合、九個之太刀、他流勝之太刀、詰座抜刀、太刀合抜刀などである。九個之太刀は新陰流の九箇の太刀に名称は似ているが、中身の「型」は名前も構成も全く異なっている。以上が一刀流の大まかな「型」の内容である。(笹森前掲書)

### 6-2 新陰流と一刀流：破の段

流れが異なる両派ではあるが、驚いたのは先に少し触れた通り、姿勢が酷似しているということである。腰を反身にして体軸を垂直に保持するように観てとれるその姿勢は同義性を印象付ける。駒川改心流は反身の姿勢や体軸を垂直に保持する構えはとらないので、この比較において、姿勢や構えの同義性は全く予想していなかった。この点だけを観れば、むしろ改心流の方が、流れの異なる流派なのではないかと思えるほどである。

また新陰流は膝を曲げて腰を落とす沈身にして所々半身の構えであるが、一刀流はこれらの構えはとらない。一部半身の構えは観られるものの多くは相手に対して真正面から対峙した構えを成している。この経緯は予想通りであった。当流における「可」と他流における「不可」が如実に出ている。

では何故同義的部分である反身の姿勢をと

るのであろうか。筆者は、かつて改心流を学んでいた時、反身の姿勢や体軸を垂直に保持するという構えはとっていなかった。その後古伝空手も学ぶようになってから以前とは真逆の構えへ、つまり反身にして体軸を垂直に保持する構えへ、すなわち新陰流や一刀流と同様の構えへと変えていった。今の筆者にとってそれが是であると考えからである。

参考までに立身流という武術を学んだ福沢諭吉の若かりし頃の全身像の写真を観てみるとなるほど「型」で育った身体の有り様を観てとれる。首が真直ぐに伸び頭部を安定した位置に支えて胸から肉がそげ落ちるような余分な力が抜けきったその姿勢は、働きが身体に内在されているが為の結果であると観てとれる。また合気道を創始した植芝盛平なども写真で観ると若い頃は胸を張った筋肉の隆々とした姿であったが、晩年はやはり胸部のスーッと落ちた力の抜けた姿勢を思わせる。

筆者の剣の稽古時代もまたその身体の有り様を求める為に、胸部をへこました感じで、背中を広げ、そして丸める姿勢を求める向きがあった。当時の筆者にとってそれが「是」であると思っていたし、剣の師もまたそのような姿勢をしばしばとっていたと少なくとも当時の筆者には観えた。

しかし、今ではその姿勢を大幅に変えている。胸を張るように胸部を開き、体軸を垂直に保持する姿勢へ変えたのである。古伝空手を学ぶようになったのが契機であったが、以前のような姿勢と構えでは、意識の集中や身体に内在するエネルギーのようなものが生まれず、逆に心の閉塞感さえ覚えたからであった。「胸を開く」という動きはまさに「心を開く」という操法(身体技法)であると体得できた結果だと心得ている。

だから今では以前とは反対で、新陰流や一刀流と同様と観るこの古伝空手の姿勢と構えによって、意識を集中させることができ、生命エネルギーを内在化させている身体感覚を

保持できて、心の開放感をも得ることができている。他者とも真正面から向き合えるという効果も自身では経験しえている。「型」の存在理由とは、まずはまさに、この身体感覚の獲得にあるとさえ今の私には思える。そのような姿勢と構えが可能になれば結果的に胸部のスーッと抜け落ちた体位が保たれるのだと今では認識している。両派の反身の姿勢や体軸を垂直に保持する構えは、筆者に、その大事を「型」として訴えているような気がしてならない。

### 6-3 新陰流と一刀流：急の段

沈身あるいは半身の構えをとるかどうかの是非に関しては、ある意味で目的は同じながらも方法を異にするという感がある。特に沈身においてはこの構えをとることで「重心」やいわゆる「気」を落とすという目的を、「身体」を通して行うのに対して、その構えをとらない場合は「意識」を用いてこれを求めているのではないかと考える。

この経緯は、「心術」の教えのひとつにあるように前でも後ろでも右でも左でもなく足の裏全体で呼吸する如く、真下に「重心」「気」を意識的に落とすことによって「足の裏全体で呼吸する如く」の極意を獲得するということと同義のことを言っているのではないかと筆者は捉えている。

たとえば中国武術には「震脚」と呼ばれる「型」の所作がある。ある実践者に聞けば外形は脚を上げて中腰に沈む瞬間に大地を踏むというものだが、内的意識的には想像で「気」の空気を飲み込み、大地を踏む瞬間にこの「気」を丹田に落としてこれを圧縮するのだという。これなどは両派の極意とする「身体」と「意識」の働きを併用したものと見える。但し反身の姿勢はとっていない。しかしながら、方法は違うものの、求めるものは同質であると考えられる。

半身に関しては新陰流において随所に観ら

れるものの、新陰流には、先述した駒川改心流のように半身を多用して体捌きで斬撃する技の構成は認められない。一刀流においても同様である。この点に関して改心流で育った筆者の臆目で見れば、ある意味では、新陰流を工夫した進化と見做している。外形的には、太刀を扱うのは腕力ではなく、身体全体それも内在する深部の力を大いに活用していると考えからである。

それに対して新陰流や一刀流では、学ぶ過程で「斬りの体捌き」による外形的に発する技の威力を認識できない危惧を感じている。しかし一方では、意識の集中や内在するいわゆる「気」を求めていると思われる胸を張った反身の姿勢によって生起する、内在的所作によって生み出される技の威力があるのかもしれない。こう考えるのは、空手の師が、時折剣を用いて指導する場合に、その有り得ないほどの技の貫通する威力を見せてくれているからである。このような技は、正しい姿勢と構えから生まれる内的な集中によって、またその集中による内在する何らかのエネルギーの高まりのようなものによって、表出が可能になるのであろうと考えている。

だから、空手の師が「外形と内形が一致した時とんでもない爆発力を生む」と述懐しているのだが、少なくとも実践を経た今の筆者には、この経緯を想起しうるのである。従ってこの経緯を踏襲していない改心流では、工夫における進歩もある反面、失ったものもあるのかもしれない。この喪失は所期のころからなのか、それとも長い「型」伝達の途中で変容してしまったのか、関心の持たれるところである。

## 7. 本論Ⅳ：流派生成の時代背景

本章では、流派の生まれた時代背景を把握しておくために、「上泉伊勢守の生涯」と「上泉伊勢守が生まれた時代」を通していかなる事情が関与しているのかをみておきたい。

そのうえで、標題の問題を比較検討する為に、「本論Ⅳ」として、さらなる考察を進めたい。

これまで紹介してきた流派の流祖は戦国の世に生きた人々である。その中でも新陰流の流祖上泉伊勢守信綱の生涯とその時代背景を観ていく。時代背景を知ることによって「型」の形骸化の要因たるものが見出せればと考えたからである。

上泉伊勢守は1508年上州、今の群馬県前橋市上泉に生まれる。幼名を源五郎といった。上泉氏は大胡氏から出ている。大胡氏は藤原鎌足を始祖とした名門である。大胡氏衰亡の危機のとき、大胡家と親族の伊勢、志摩、丹後の国守である一色左京太夫義直が、三男である源五郎義秀を上州へ赴かせて大胡家再興を図った。大胡家再興後、正系の者に大胡城を譲り義秀は上泉に城を立て上泉氏を名乗る。これが上泉氏の興りであり、彼が上泉伊勢守の曾祖父である。曾祖父は、念流、中条流、京都名代の兵法者であったという（諸田・1985・pp.50-51）。

なるほど伊勢守の血筋が肯けるものである。伊勢守もまた幼少より武術を陰流の流祖愛州移香齋や、鹿島神流の松本備前守に学んだといわれている。

上泉伊勢守は、「上州の黄斑（虎）」と呼ばれた長野業正に仕え、共にこの地を守っていたとされる。城主として家来とその家族そして民を守る身の上であった。戦国武将としても「上州一本槍」と称されるほどの活躍をする。戦に明け暮れていた頃は一介の剣士というよりも、城主としてまた武将として戦乱の世を生きなくてはならない身であったであろう。戦国時代における上州は、上杉、北条、武田の三家に囲まれた政情不安定な地域であった。その中で同じ上州の中でも敵味方に分かれて生きるために必死に戦ったと伝えられている。（諸田前掲書）

戦国時代についての印象は、上杉謙信と武田信玄の争いがあり、それに遅れる形で織田

信長が勢力を伸ばして秀吉が天下を鎮め、家康がこれを平定するという時代相にあった。こうした時代を背景にして、英雄、豪傑の華やかな戦いぶりが展開されたのである。しかし現実には非情ともいえる不安定な凄惨を極めた時代であったであろう。古い時代から新しい時代へ変わるような過渡期には全てが勢いを増す。残酷、凄惨さもそれに比例していると考えられる。略奪、放火、人身売買など頻繁にあったされている。（諸田前掲書）

当時の生活感情として、「死」というものが、今の我々には及びもつかないほどに身近に存在して働いていたのではないだろうか。いわゆる日常生活における死生観の問題である。そのような争いを経て武術の流派らは興ったのである。流派は、自らの身を、身内や家来、民の命を、その暮らしをひたすら守る中で必然的に生まれたのだと思う。

現代日本では明日のわが身の命が、不慮の出来事はあったとしても、十分に保障されているのであるから、「生」に貪欲にならずとも生きていける。筆者などは、いつ起こるともわからない刹那の不慮の出来事に対峙できるよう、技を磨く意識をもって実践しているつもりなのであるが、戦国時代においては「明日は我が身の命も分からない」という現実の中に居る。その心の有り様は全く以って比べるのもおこがましい。武術は生きる為に不可欠な身体技法であったのである。

伊勢守は、上杉側として長野業正らと共に戦うのだが、武田勢に屈服する。その後武田側に仕えて武田信玄より「信」の字を賜り「信綱」と名乗っている。側近でもあったといわれる疋田文五郎や神後宗治らが伊勢守直系の門下としてこれをよく学んだとされている。駒川太郎左衛門も長野家に仕える身であったので、伊勢守に師事するのは当然の成り行きであったのであろう。（諸田前掲書）

武田家に仕えることを辞して伊勢守は諸国遊行の旅に出る。この時に連れ立ったのが疋

田、神後両名などであったということである。伊勢守は奈良の柳生の里に赴き柳生石舟斎宗厳に会い、立合って石舟斎が負けたことで伊勢守に就いて剣を学んだともいわれている。一説では疋田文五郎が立合ったとされている。石舟斎はこれを継ぎ、柳生新陰流を成した。晩年の伊勢守の足取りの詳細は不明である。柳生の里で亡くなった、小田原にて没すなど様々な説がある。諸田氏の説では小田原にて享年七十五歳で亡くなったという。また応仁の乱からの遠祖に戦人（いくさびと）としての悲壮な戦死が多々あり、伊勢守の父、子、孫も、華々しい戦場での活躍後いずれも戦死している。（諸田・1984・pp.64-72）

前橋市上泉町の西林寺には伊勢守の供養碑が建立されている。筆者は10年以上も前にこの地を訪れたが、楷書のしっかりした字で名前の刻まれた大きな石碑であった。伊勢守は、生まれ育って守ったその地を離れて放浪の身となり、身を寄せたところは、柳生などの京に近い土地であって時代的にも戦禍が激化したことと思われる。長居のできる状況ではなかったのではないだろうか。戦、放浪、修行の果てに伊勢守は剣術に何を見出したのだろうか。

伊勢守は竹刀を発明した人でもある。剣道のそれとは違うが原型ともいえる。袋竹刀と呼ばれるもので、割った竹を束ねてなめし革の袋に入れてうるしをかけたものである。木太刀や真剣では思い切った打ちのできぬことを考えてのことであろうか。

打っても相手の肌へ触れる寸前で止める。これを「つめる」といって、太刀が肌近く止まるほど「よくつめた」ということになる。防具のない時代の工夫でもあった。その後竹刀や防具が導入され竹刀稽古が盛んになり今の剣道に繋がっているわけだが、失ったものもあるのではないだろうか。実際の真剣の場を想定していたものが、いつの間にか「太刀筋のない打ち方」に技を変容させてしまうま

でに、その「失ったもの」は働いてしまったように思われてならない。

また「死」が目の前にある、切羽詰った意識状態で行う「型」稽古と、現代のように剣の怖さも知らず競技的になった稽古とを比べてみても、到底その当時と等質のものにはならない。このように推察するのは筆者のみでなかろう。

現代日本においてはいわゆる戦国時代のような「争い」は皆無である。戦国時代からみれば平和な世の中である。「型」が形骸化するのとは必然の流れなのかもしれない。武術の必要性がないともいえる。それでも現代においてなお武術が存在している理由とは何であろうか。そしてこれを学ぶ意味、意義とは何であろうか、この点について最後にまとめておきたい。

## 8. まとめ

戦国時代のような武術を直接的に「殺」として活用する時代から、天下平定後はそのような活用の場は徐々になくなった。しかしその後も流儀、流派の勃興はあり、江戸後期においては500種以上の剣術流派があったという（山田・1925・p.309）。その中には本質の伴わない流儀、流派もあったのではないだろうか。あるいは代が変わって形骸化してしまっただろうか。こうした傾向は「平和の度合」の進行に比例していると考えられる。

そして幕末にはまたそれが再燃したように思う。幕末にも優れた剣豪が出たことからこの経緯は伺える。剣豪とは無刀流の山岡鉄舟や直心影流の男谷精一郎、天真白井流の白井亨などである。現在に至るまで変容は進行するのであるが、今や様々な武術、武道、格闘技団体が存在している。理由の一つにはやはり「人は合い争うという業（ごう）を潜在的に持っている」からではないだろうか。本能的に誰もが多かれ少なかれ持っているのである。しかしこの「性（さが）」から我々は

何を学ばなければならないのか。

上泉伊勢守の詠んだとされている歌を引いておきたい。

「善も友悪きも友の鏡なる見るに心の年  
をみがけばやむる捨る分るも一つにも  
心次第なり」

と心境を詠んでいる（山田・1925・p.47）。現在の筆者が最も惹かれる歌でもある。

伊勢守はあの戦国の血生臭い世の中から、武術を通して、経験的にこの歌の神髓を悟ったのである。抜けば必ず斬るというレベルを目指し常に磨くと同時に抜かない。斬らないで治めるよう我が身を修めることを知る。この歌には、さしずめこうした極意を学ぶ、含蓄があるのではないだろうか。それでは技をどのように追求すればこのような心境に成り得るのであるか。

技のみの面であれば、ひとつには戦国あるいは幕末の世のような場所に自らをさらけ出すことである。しかしこれは現実的には無理である。現在では競技スポーツが盛んである。ならばこそ、筆者としては、ようやくある段階のものを身に付けた「私」というこの存在に、競技という擬似的実戦の場を課したいと考えている。

さて、「型」を山の裾野から頂上への登攀過程の「ボトムアップ式」と考えれば、即実戦に身を置くということは「トップダウン式」と想定できる。この二つの方式の並存は正しく確かなものを身に付ける為には不可欠であると考え。「型」稽古と「竹刀」稽古や「組手」稽古や「乱取り」稽古が並存するのはこのように「実戦」のない日常の故に生成された一つの「工夫」であり「文化」とであると捉えられるのではないか。

他方で、ひとつには現代社会における時代状況なりの厳しさに身を置き、身についた「学び」そのものを生活の中で実践していくことである。この生活的実践の問題は筆者の空手の師も弟子によく説かれており納得でき

るものである。第15代直心影流の山田次郎吉は『日本剣道史』で「針ヶ谷夕雲や金子夢幻などは達人ではあったが、世用に施すに欠く」と批判している(山田・1925・p.5-6)。

実際に私も社会人として長く会社勤めをしていた。不運なことに大学卒業後入社して配属になった部署が、中国へ生産現場を移したことで、閉鎖されてしまうという憂き目に遭った。かつての筆者は仕事の上で人と衝突することもしばしばあった。それは事を成すには止むを得ない必要なことであると考えていたが、今では、武術的に観ても人との調和を欠いた「下(げ)の位」の器量であったことが分かる。社会に復帰した時、筆者なりに、「下(げ)の位」を変容させて、如何に社会へ貢献できるかが一つの修行と考えている。

いわゆる「心身一如」という言葉がある。武術を実践して感じるのは、身体は本当に心と繋がっているのだということである。先にも述べたが以前の筆者は「胸をへこませ背を丸めた姿勢」をとっていた。また剣の師から「動きを消す、気配を消す、我を消す」(黒田・1997・p.147)といわれたので真面目にこれを求めた。そのような姿勢だと「暗いどんよりとした気持ち」を引き起こし、まるで魂のない抜け殻のような意識状態であった。

江戸期の武士の教科書的存在であった伏斎橋山の短篇「猫の妙術」によれば、鼠を捕る最高の境地にある猫とは、己という存在また他者という存在も忘れ、生きながら生きていなく、在りながら無いという存在であると説かれている。(山田・1936・pp.258-259)この言説を借りれば、私もまた、まるで意識のない人形のように振舞う意識、態度を求めていたことになる。この時、感じたのが、心の閉塞感である。当時は「これで技が身につくのなら構わない」と魂を売る思いに呪縛されていたようである。

その後、筆者は、空手の師にも就くようになり、「胸部を開くこと」などの姿勢、構え

を見直す契機を得ることができた。心を開くことを「胸を開く」ともいうが、まさにこのような姿勢をとることで心の開放と充足感が得られることを感知したのである。この経緯は、古くは沢庵和尚が書いた『不動智神妙録』において「放心」という言葉で示されている。語源は中国の孟子から来ているという(黒田亮・1980・pp.126-128)。

関西大学で太極拳の実践指導をされている劉莉先生にこの話をしてみると、「放心」とは中国語で「安心する」という意味であることを教えていただいた。なるほど「心を解き放つ」から安堵できるのだとその時に理解できたように思う。この学びは他者との人間関係の中でも大きく影響を与えてくれている。

人は、赤子の時のような何者にもとらわれない意識の状態から、他者を知ることによって自己を「閉じる」傾向になると考えられる。新陰流転会の前田英樹は「上泉伊勢守の偉大なところは何もないところに『間』を生み彼我の関係を創出し、自己を掘り下げることをしたことである」と評している(甲野・1991・p.106)。

心を閉じるのではなく「開く」ことで他者の心をもわが心にするのを武術は気づかせてくれる。敵を持たないこと、でも一度抜けば必ず斬るレベルまでに技を追求すること、同時に抜かないことと斬らないことを学ばせてくれるのである。このような相矛盾するものを統合し、人格の陶冶を目指すものを内在しているのが武術であって、この「一点」にこそ、現代における武術の存在理由と学習意義が存在していると私は考えている。そしてこの経緯こそは「型」稽古を措いて身に付けさせる方法がないことを示すものである。別言すれば、「修行」に身を置いてこそ、人格を磨くことも可能になるのである。

人が幸せになる。夢を叶える。成功する。そのためには、相手の立場に立って、物事を考えることが不可欠であると考え。それは

相手を慮ることであり、思いやることである。あらゆる戦略もまた他者を知ることから始まる所以であろうか。

現代社会においては「頭脳」が先んじて「身体」が遅れているばかりか後退しているように思えてならない。情報化社会に生活する現代人は生身での人との触れ合う機会を大幅に失わせている。テレビゲームなどのバーチャルな代理経験では、あたかも体験したようであっても、実際には何も身に付いていない。だから歪曲した認識のもとに、例えば看護婦が「赤ん坊を風呂に入れる」ところを「熱湯風呂に入れてしまった」というような錯誤が起きてしまうのである。こうした錯誤は、他者との身体を通した触れ合いがないから、それがために相手の立場にたった考え方が真に身に付いていない、典型的な自己本位行動の一つの事例であると見做してもよい。

2008年状況の現在「身体論」が巷間でも注目されているのは「身体的なもの」が失われているからともいえる。武術は人を殺める技術の集約である。きれい事を言うつもりは毛頭ない。しかし転じて「生」に積極的に利用できるとしたら、学ぶべきことが多々あるのでないか。殴られれば痛い。転ずれば、この痛みを通して、他人の痛みを知ることができるのである。また「身体」から「心」に辿り着き「私という存在」を「開く」ことを学ぶことも可能であろう。開いた身体は他者との調和を齎（もたら）すと考えられる。そのようなことを学ばせてくれるのが武術の「型」の存在である。これからも「型」稽古を実践すると同時に、転じて「学び」を「人」との「かかわり」の問題に生かしてみたい。これが昨今の筆者の夢である。

## 9. おわりに

本稿を書き終わってみて初めて、筆者如きがよくも新陰流と一刀流との二大流派の比較検討という途方もないことを仕出かしたもの

だと思ふ。また、修行半ばにして、よくもかつて学んだ流派との比較検討を試みたものだと感じている。しかし比較検討を試みて分かったことは、武術の本質は一つであるといわれていたものの、また筆者自身もそう思っていたのだが、近しい流派同士においてさえも、「型」「手順」「呼び名」「構成」「姿勢」や「構え」などの内容において、予想以上の差異があるのだという発見である。

日本においては他流のことを言挙げしない傾向にある。こうした事情のもとで、筆者の行為はどう評価されるのであろうか。それは今後の批評に委ねることにする。ここで流派の術技的な是非を問うつもりはない。できる「器」でもない。この研究は単純にして純粋な好奇心から始まったものである。東洋思想と西洋思想に違いがあるように流派ごとにも違いがあるのであればこれを知りたいと思ったのである。知ることによって筆者自身の実践の糧になるとも考えたし、またこれまでの歩んできた筆者の経験を整理するよい機会であるとも判断したからである。

高校時代は寝ても覚めても空手をやりたいと願い、大学進学と同時に憧れの道場に通り、いつかはチャンピオンになることを絶えず模索し実践してきたつもりである。そして、時間は作るものだといわれているが、一旦社会に出ると嵐のような毎日で日々が過ぎていった。その後、社会人を一旦降りて、あらためて関西大学に編入学し身体運動文化専修に所属し、時間の許すかぎり修学に没頭できたことには、何かの運命もしくは機縁というものを感ぜずにはいられない。来年も引き続き関西大学文学研究科身体文化専修修士課程において、自身の実践と研究を行っていく所存である。

今ここに筆者が存在できるのはその時々に出会った人達のお陰である。その人達が居たからこそ出会いの時空間で筆者は学び成長できたのだと思ふ。今はもう会えない人達、会

えないが気持ちで繋がっている人達、これからも共に歩み続ける人達、教えを請う人達、全ての方々に一つの節目として、改めて感謝の意を表して本研究の終わりとさせていただきます。

**【引用・参考文献】**

- 1) 赤羽龍夫 2007 『柳生新陰流を学ぶ』 剣道日本
- 2) 入江龍夫（代表） 1988 武道傳書集成 第1巻 『田宮流兵法居合』 筑波大学武道研究会
- 3) 入江龍夫（代表） 1990 武道傳書集成 第4～6巻 『新陰流関係資料上・中・下巻』 筑波大学武道研究会
- 4) 入江龍夫（代表） 1993 武道傳書集成 第9巻 『一刀流関係資料』 筑波大学武道研究会
- 5) 黒田鉄山 甲野善紀 1988 『武術談義』 壮神社
- 6) 黒田鉄山 1991 『居合術精義』 壮神社
- 7) 黒田鉄山 1992 『剣術精義』 壮神社
- 8) 黒田鉄山 1997 『消える動きを求めて』 合気ニュース
- 9) 黒田 亮 1980 『勘の研究』 講談社
- 10) 甲野善紀 1991 『人との出会いが武術を拓く』 壮神社
- 11) 前林清和 2006 『近世日本武芸思想の研究』 人文書院
- 12) 三谷義里 1986 『詳細居合・無双直伝英信流』 スキージャーナル
- 13) 諸田政治 1984 『上毛剣術史 中 剣聖上泉信綱詳伝』 煥乎堂
- 14) 笹森順造 1986 『一刀流極意』 体育とスポーツ出版社
- 15) 時津賢児 1993 『武道の方法叙説』 壮神社
- 16) 宇城憲治 2000 『武道の原点』 合気ニュース
- 17) 柳生巖長 1989 『正伝新陰流』 島津書房
- 18) 山田次郎吉 1925 『日本剣道史』 東京商科大学剣道部
- 19) 山田次郎吉 1936 『剣道叢書』 水心社
- 20) 財団法人日本武道館2005 演武：妻木正鱗『日本の古武道・田宮流居合術』（DVD）